

2025年度

渡邊利三デモクラシー・フェローシップ

「訪米プログラム」報告書



2025 年度渡邊デモクラシー・フェロー。ワシントン DC のワシントン記念塔前にて。

渡邊利三デモクラシー・フェローシップの概要

「渡邊利三デモクラシー・フェローシップ」は、アメリカ・ロサンゼルスにある全米日系人博物館(JANM)のデモクラシーセンターによる、日本の次世代リーダーを対象としたプログラムです。2週間の訪米プログラムをはじめとする1年間の研修を通して、政府、経済界、市民社会のリーダーと交流し、民主主義やインクルージョンの価値と実践への理解を深め、日米関係の強化を図るグローバルなリーダーのネットワークを形成します。

2025年度の渡邊利三デモクラシー・フェローらは訪米プログラムを前に、東京で2日間にわたるオリエンテーションに参加し、アメリカの社会や政治、アメリカのDEIの歴史と現状について学びを深めるとともに、在日米国大使館や日本国外務省北部局を訪れました。

訪米プログラムは、2025年7月21日(月)から31日(木)のおよそ2週間にわたって実施しました。ロサンゼルスとワシントンDCで、米日の政府関係者やNGO、ジャーナリストら、民主主義社会を構成するさまざまなステークホルダーと面会し、対話を持ちました。この報告書では、訪米プログラムの各日の行動や、訪米プログラムを終えての感想を2025年度フェローに執筆いただきました。

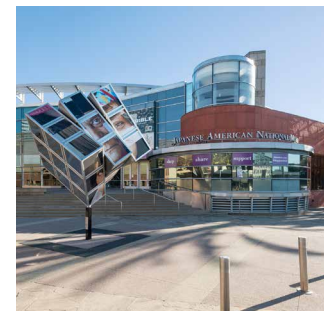
この後、フェローらは2026年6月に予定している公開プログラムにて、このフェローシップの学びをプログラムの形で発表し、2025年度フェローシップを修了します。



「渡邊デモクラシー・フェローシップ」運営団体について

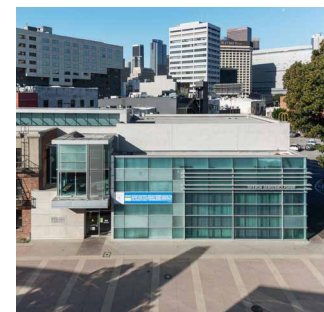
全米日系人博物館(JANM)

ロサンゼルスに歴史あるリトル東京地区に位置する全米日系人博物館(JANM)は、1985年に設立された非営利団体の博物館です。第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容から得た教訓が忘れ去られることのないよう、日系アメリカ人の経験を共有することによって、アメリカの民族的・文化的多様性への理解と認識を促進しています。



ダニエル・K・イノウエ民主主義保存全米センター(デモクラシーセンター)

JANMの中にあるデモクラシーセンターは、来館者がアジア系アメリカ人の過去と現在の経験を学び、人種、アイデンティティ、社会正義、そして民主主義の形成について語り合う場です。あらゆる世代の人々が集い、民主主義について学ぶことで、人々の意識の変化や文化の尊重、政治への市民参加を促進していきます。



渡邊利三デモクラシー・フェローシップは、渡邊利三氏(公益財団法人 渡邊財団名誉会長)からのご寄附によって実施しています。また、モーリーン&マイク・マンズフィールド財団が、ワシントンDCにおける事業実施パートナーとして関わっています。



渡邊利三デモクラシー・フェローシップ

ホームページ | www.janm.org/ja/democracy/watanabe-democracy-fellowship

お問い合わせ | democracyfellowship@janm.org (渡邊デモクラシー・フェローシップ事務局)

2025年度渡邊デモクラシー・フェロー

**石森孝志**

三菱電機株式会社

**河野美紗子**

独立行政法人国際交流基金

**関本さと**

横浜市役所

**柴田莉沙**

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

**白川大介**

日本テレビ放送網

**白倉裕美**

日本郵船株式会社

**和島 歩**

MUFG バンク (ブラジル)

**矢後千紘**

富山県立高岡高等学校

各日のプログラムの報告

7月21日[月]

ロサンゼルス第1日

- ・全米日系人博物館の収蔵庫見学
- ・日系アメリカ人強制収容所経験者の談話
- ・アジア系アメリカ人研究についての講義
- ・リトル東京視察

7月22日[火]

ロサンゼルス第2日

- ・ホームボーイ・インダストリーズ訪問
- ・座談会「移民の権利について」
- ・リトル東京のコミュニティの維持とケア
- ・ドジャース・ゲーム

7月23日[水]

ロサンゼルス第3日

- ・ABC7ニュース・スタジオツアー／ 座談会「民主主義を守って
いくためのジャーナリズムの役割」
- ・グレートウォール・オブ・ロサンゼルス訪問
- ・MOCA「タカコ・ヤマグチ」展ツアー
- ・ブルワリーでの歓迎レセプション

7月24日[木]

ロサンゼルス第4日

- ・ラ・プラザ・デ・クルトゥラ・イ・アルテス展覧会&オルベラ街視察
- ・メディアにおけるアジア系アメリカ人の代表性
- ・在ロサンゼルス日本国総領事公邸でのレセプション

7月25日[金]

ロサンゼルス第5日

- ・マンザナー強制収容所跡(マンザナー国定史跡)訪問
- ・マンザナー閉鎖後の再定住と記録のデジタル化
- ・ロサンゼルス第6日: ジャパン・ハウス・ロサンゼルス訪問

7月28日[月]

ワシントンDC第1日

- ・マンズフィールド財団によるDCプログラムの概要説明
- ・アメリカ合衆国国務省東アジア・太平洋局
- ・前政権職員とのランチミーティング
- ・JCIEとNEDとのミーティング
- ・スミソニアン・アメリカ建国250周年記念祭準備について
- ・マンズフィールド・フェローとのカジュアル歓迎レセプション

7月29日[火]

ワシントンDC第2日

- ・シンクタンク&学術界座談会
- ・経団連米国事務所とのミーティング
- ・在米日本国大使館でのランチレセプション
- ・スミソニアン・アメリカ美術館での「ピクチャーズ・オブ・ピロンギング」展

7月30日[水]

ワシントンDC第3日

- ・連邦議員オフィススタッフとのミーティング: ダン・サリバン連邦上院議員(共和党、アラスカ州選出)の国家安全保障担当補佐官のウォルター・ローマン
- ・連邦議員オフィススタッフとのミーティング: マーク・タカノ連邦下院議員(民主党、カリフォルニア州選出)の立法ディレクター、エイドリアン・カストロ
- ・議会調査局の座談会
- ・ワーキングランチ: キャピトルヒル政策ブリーフィング
- ・APIA ヴォートとのミーティング
- ・コロンビア特別区(ワシントンDC)キンバリー・バセット区長秘書官とのミーティング

7月31日[木]

ワシントンDC第4日

- ・国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館
- ・アムネステティ・インターナショナルUSAとのミーティング
- ・ヒューマン・ライツ・キャンペーンとのミーティング
- ・送別レセプション

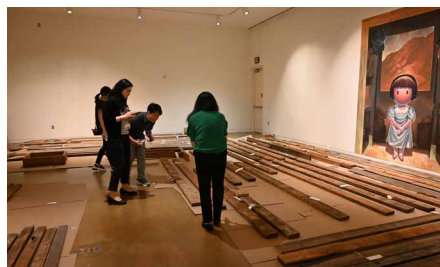
7月21日[月] ロサンゼルス第1日

全米日系人博物館の収蔵庫見学

訪米プログラムは、本フェローシップの実施団体である全米日系人博物館(以下、JANM)からの概要説明と、収蔵庫のツアーで始まりました。JANMは、1985年にNPOとして設立され、日系アメリカ人に関する絵画や衣類、フィルムなど約16万点以上のコレクションを所蔵しています。所蔵品の大半が日系アメリカ人により寄付されたもので、所蔵品の中には、強制収容所で描かれた絵画や、生活で用いた製品も含まれます。所蔵品を適切に保管するほか、デジタル化も進めています。また、JANMは、それら所蔵品にまつわるストーリーも収集しています。

JANMは個人や団体からの多くの寄付で運営されており、1999年には「日系アメリカ人の歴史は、日本人の歴史でもある」として、当時の経団連会長をはじめ日本企業からの寄付など多額の寄付を受け、新館が建てられました。現在は、新館をリノベーション中ですが、リノベーションに合わせ、1990年代に第二次世界大戦中の強制収容所から博物館に移設された、戦時中に日系人が住んでいたバラックも解体され、1990年代当時の状態への修繕作業も行われています。

現在、各所で連邦政府からの補助金がカットされていますが、同館も例外ではなく、一部プログラムの補助金が削減されましたが、その分も寄付で賄えるほど個人や民間からの支持を得られているそうで、改めて米国社会やそこに根差す日系人社会の力強さを感じました。



日系アメリカ人強制収容所経験者の談話

続いて、JANMのボランティアでもあり、第二次世界大戦中の強制収容所の経験者2名から、当時の体験談をうかがいました。お二人にとって、つらい体験でもあったと思いますが、私たちに語り継ぐこと、歴史を伝えることを使命のように考えられていると感じました。

ジューン・アオチ・バーク氏からのお話:1932年生まれの子供。リトル東京で幼少期を過ごす。10歳から13歳の間、強制収容所(キャンプ)で過ごす。「Never give up our dignity(尊厳を失うな)」を合言葉に、キャンプに強制収容される際も泣く者はいなかった。キャンプ内に学校を設立するなど、〈子どものため〉に親世代が〈一生懸命〉〈頑張った〉(〈〉内は、経験者がキーワードとして日本語で語った言葉)。キャンプ内は、プライバシーを保つのが難しい状況ではあったが、親世代の頑張りで、子どもとしてはキャンプでは比較的楽しく過ごした。親世代は苦しんだが、子どもたちが幸せに暮らせるようにしてくれたことを感謝している。今でも母親が保管してくれていた着物を持っている(キャンプに持っていけるのは1人につき2つのスーツケースのみだったが、その中に入れていたということ)。親世代は、日本政府を悪く言うことはなかった。自身としては、戦争は、日本人が起こしたというより、軍部が起こしたことだと感じている。

リチャード・ムラカミ氏からのお話:ロサンゼルス近郊のロングビーチ付近で農家の家に生まれた三世。当時は、学校にマイノリティーは自身を含めて3人のみ(日系1人、メキシコ系2人)。10歳で強制収容所に収容される。20ft×20ft(約6m×6m)のバラックの部屋に家族で住んでいた。キャンプでの生活はどうだったかと尋ねられれば、楽しかったと答える。親世代が、子どもたちが楽しめるように配慮した(〈がまん〉した)。戦後、父親は一言も戦時中のことを話さなかった。





アジア系アメリカ人研究についての講義

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) アジア系アメリカ人研究センターの
リリー・アン・タマイ講師から、アジア系アメリカ人研究についての講義を受けました。
講義の後には、自分たちの社会の中で変化が求められる問題について、フェローを
交えてディスカッションが行われました。

講義では、日系アメリカ人の歴史を学ぶと、民主主義がいかにもろいものかが分
かること、アメリカでは人々の階級ではなく人種が中心にあり、それによって人々は
判断されがちであること、アジア系アメリカ人とは政治的な名称であり、差別など同
じ苦しみを受けた者同士がまとまることで政治的な力を発揮してきたこと、アジア系
アメリカ人は自分たちが受けた差別を他の人種であっても繰り返されないようにとの
思いで活動をしていることなどを学びました。

続くディスカッションでは、フェローから女性の立場の問題、外国人の問題、マイノ
リティーの問題、学問における多様性欠如の問題などが挙がり、それぞれについて
意見を交わしました。こうしたディスカッションを通じて、フェローの多様性、そして多
様であることの意義を改めて感じました。

リトル東京視察

初日の最後は、リトル東京歴史協会 (Little Tokyo Historical Society) のマイケ
ル・オカムラ氏 (日系四世) の案内により、ロサンゼルスの日系人街であり、JANM が
その一角に建つリトル東京を視察しました。

戦前はカリフォルニア州内に40以上の日本人街がありましたが、現在はリトル東
京を含めて4つが残るのみだそうです。リトル東京の歴史的な街区では、日系人の
歴史が年表のように示されたアートが歩道全体に施されているなど、日系人の歴史
を保存しようという動きが活発に行われていました。一方、中華街のように観光客を
集めるためのエリアとして、日本村プラザという日本の飲食店やキャラクターなどの
コンテンツを扱うショップが並ぶエリアもありました。

本年6月には、ロサンゼルスを中心として全米で、移民の取り締まり強化に対す
るデモが行われましたが、その際は
リトル東京にもデモ隊が押し寄せ、
JANMも含めリトル東京のあちこち
に落書きなどが残されたとのこと。街は現在、きれいな状態に戻され、平
穏を保っており、観光客も多く訪れて
いましたが、各店舗にはリトル東京が
移民によって成り立っている街である
として、共感を示すポスターが貼られ
ていました。ニュースで見聞きしてい
たことに実際に触れ、移民社会が直
面する現実を目の当たりにした瞬間
でした。



(文：関本さと)

7月22日[火] ロサンゼルス第2日

ホームボーイ・インダストリーズ訪問

まだ少し残る時差ボケと闘いながら迎えたプログラム二日目の朝は、ホームボーイ・インダストリーズ (Homeboy Industries) での午前7時30分の朝食から始まりました。ホームボーイ・インダストリーズの創設は1992年、グレッグ・ボイル神父がギャング・元ギャングを支援する青少年プログラムを開始したことに遡ります。今日では毎年数千人を受け入れる世界最大のギャング更生・雇用機会提供・社会復帰支援企業となっています。

従業員が元ギャングと聞き最初は身構えていましたが、朝食をとったカフェは皆さんのフレンドリーな笑顔で溢れていました。その後、同社社員が会する朝会に同席しましたが、社内標語の唱和、誕生日のお祝い、当日のおすすめカフェメニュー・アパレル商品の紹介等、終始和やかながら活発な雰囲気が印象的でした。朝会を通じて顔を合わせることで更生後に孤独感を持たせない仕組みや、統一されたロゴのシャツを着用することで会社の一員としての一体感の醸成等、コミュニティーの一員を包摂するインクルージョンを体現していました。ギャングの更生、再犯罪率減少に寄与しつつ、14もの事業運営により企業としての成長を両立しており、社会課題解決型企業の実例としての意義が大きく、日本の社会としても学ぶべきことが多いと感じました。



座談会「移民の権利について」

JANMのデモクラシーラボに戻り、アジア系アメリカ人公正向上協会南カリフォルニア支部 (Asian Americans Advancing Justice Southern California, AJ SOCAL) のロネット・ラモス氏、アカシア・センター・フォー・ジャスティス (Acacia Center for Justice) のリサ・オカモト氏のお二人に会い、今日著しく困難な時代を迎えている米国内の移民に関する実情を聞くことができました。本年、当局とデモ隊との衝突が起きたリトル東京では、移民税関執行局 (Immigration and Customs Enforcement, ICE) による書類なき移民 (undocumented immigrants) の強制送還が取り沙汰されています。公選弁護士を利用する選択肢が与えられていない移民のための弁護士を提供する法的サービスの実施、移民問題に関する政策提言や住宅の提供等により支援を行うコミュニティーのリーダーであるお二人からは、「Giving up is not an option. (諦めるという選択肢はない)」という、移民への支援を決して諦めない強い意思・覚悟を感じることができました。

移民コミュニティは今、強制送還の恐怖を抱えています。送迎中のICEによる連行を恐れ、子供の学校の出席率低下、バス・地下鉄などの公共交通機関の利用率低下といった社会的インパクトも誘引しています。マイノリティーのエスニシティグループに対する社会的奉仕の精神、支援の手を差し伸べ続ける姿には、尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。政府からNPO・NGOへの資金・補助金が削減されている中で、情熱だけでは必要な支援を維持することのむずかしさに歯がゆさを感じました。

リトル東京のコミュニティの維持とケア

昼食後、NPOであるリトル東京コミュニティカウンスル(Little Tokyo Community Council, LTCC)およびリトル東京サービスセンター(Little Tokyo Service Center, LTSC)との対話の機会がありました。いずれもリトル東京というコミュニティのために働いており、LTSCは住宅・生活基盤支援、就業訓練、心療内科サービスを提供し、LTCCは日系アメリカ人コミュニティを一つにまとめあげ、行政に対するOne Voice(一つにまとまった意見)の強化にも貢献しています。

コミュニティベースで、リトル東京の権利や歴史的価値を明確に認識し、獲得した権利を当たり前のもと思わず、世代を超えて維持する努力がなされてきたことに感銘を受けました。コミュニティを守るというステークホルダーの使命感に触れることで、私たち自身の「地元」への貢献意識についても考える良い契機となりました。



ドジャース・ゲーム

二日目の締めくくりには、ドジャースタジアムで大谷翔平、山本由伸選手らが所属するロサンゼルス・ドジャースとミネソタ・ツインズとのナイトゲームを観戦しました。山本選手の投球、大谷選手の姿をこの目に焼き付けつつ、日系アメリカ人の歴史を持つロサンゼルスにおいて、日本人選手の活躍にいくばくかの誇らしさを感じた夜でした。残念ながらドジャースが試合に負けてしまったこと、そして大谷選手が9回裏にホームランを打ったことを私たちが知ったのは、渋滞を避けるために8回裏に去った帰りの車の中でした。



(文:石森孝志)

7月23日[水] ロサンゼルス第3日

ABC7ニュース・スタジオツアー／ 座談会「民主主義
を守っていくためのジャーナリズムの役割」

LA3日目の朝は、郊外にあるABC7スタジオへの訪問から始まりました。迎えてくれたのは日系アメリカ人キャスターのデイビッド・オノ氏。「ABC7アイウィットネス・ニュース」のキャスターとして活躍するとともに、ジャーナリストとして数々の賞を受賞しています。

座談会では、デイビッド氏のモデレートのもと、ラティーノの観点から食や民主主義について伝えてきたコラムニストのグスタヴォ・アレラノ氏、「LAタイムズ」紙に長年勤め東京支局長も務めたテレサ・ワタナベ氏、ABC7で初めてアジア系女性としてニュース・ディレクターとなったパム・チャン氏が、現在のアメリカの状況の中で民主主義を守るためのジャーナリズムの役割などについて議論しました。

ICEによる国外退去が大きなトピックとなっている今、何が大変かという質問に対するパム氏の「報道する側も『人間』である」という答えにはハッとさせられました。実際に報道に関わるスタッフの親などの家族が、国外退去のリスクが高い Undocumented Immigrants (書類を持たない移民) であることも多い中、スタッフのメンタルへの影響も大きいとのことでした。また、ABC7では移民などのトピックの取材の際には記者に警備をつける必要が出てきたことや、デイビッド氏が取材中に「嘘つき」呼ばわりされ取材が妨害されたというエピソードは、民主主義の危機の中でジャーナリストが攻撃される実例として心が痛みました。

ディスカッションの中で印象的だったのは、4人がそれぞれに、民主主義が危機にさらされている今だからこそ、報道の役割を信じ「やるべきことをやる」(パム氏)という強い意志を持って職務にあたる姿勢でした。さらに、グスタヴォ氏はコラムニストが報道記者より踏み込んでメッセージを伝えられるという特性について、テレサ氏は変わるメディア地図の観点から信頼できるメディアを受け手もサポートしていく姿勢の大切さについて強調していました。

その後は、デイビッド氏の案内によりABC7の生放送中のスタジオや副調整室を見学。

最先端のテクノロジーと、洗練されたプロフェッショナルの技に一同感嘆しました。



グレートウォール・オブ・ロサンゼルス訪問

午後はLA北部、タハンガ・ウォッシュ水路の壁に約800メートルにわたり描かれた壁画「グレートウォール・オブ・ロサンゼルス (Great Wall of Los Angeles)」を訪問し散策しました。この壁画はアーティスト、ジュディス・バカの指揮により1978年から制作されてきたもので、マジョリティーの白人男性の視点から語られてきた従来の歴史観へのカウンターとして、ネイティブアメリカン、ラテン系・アフリカ系、アジア系、ユダヤ系アメリカ人の歴史や、女性の権利獲得、黒人・LGBTQ差別への闘いなどがテーマとして描かれています。

私たちは、今回の旅でのそれぞれの学びや、自身のバックグラウンドと重なるモチーフを見つけて、その人物や出来事について調べたり記念撮影をしたりしました。



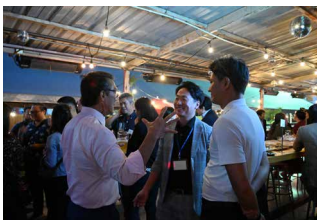
MOCA「タカコ・ヤマグチ」展ツアー

続いて訪問したロサンゼルス現代美術館 (Museum of Contemporary Art, Los Angeles、MOCA) では、日本出身の画家タカコ・ヤマグチ氏作品の企画展を見学しました。私たちを案内してくれたシニア・キュレーターのアンナ・カツツ氏によると、メキシコの壁画運動、ルネサンス美術、日本画(日本画)、そしてアール・ヌーヴォーの影響を受けたヤマグチ氏の絵画は、ジグザグ、渦巻き、編み込みといった「東洋」と「西洋」に影響を受けた抽象的なモチーフを使い、雨、波、山といった自然の形態を表現している点に特徴があるのだそうです。



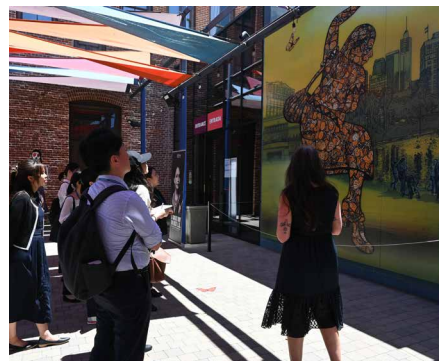
ブルワリーでの歓迎レセプション

夜は、おしゃれなブルワリーにて私たちフェローの歓迎会が開かれ、JANM関係者、ロサンゼルス日系アメリカ人コミュニティー、日本企業の駐在員など多彩なメンバーとの交流の機会が持たれました。



(文: 白川大介)

7月24日[木] ロサンゼルス第4日

ラ・プラザ・デ・クルトゥラ・イ・アルテス展覧会&オルベ
ラ街視察

メキシコ系アメリカ人の歴史と文化を伝える博物館、ラ・プラザ・デ・クルトゥラ・イ・アルテス (LA Plaza de Cultura y Artes) では、展覧会ディレクター&シニアキュレーターのカレン・クルーズ・ヘンドン氏とチーフ・オブ・スタッフのトレイシー・セラーノ氏、コミュニティイニシアチブのエンゲージメント・マネージャーのアルマンド・ロドリゲス氏から、プエブロ (ネイティブアメリカンの共同体) を起源とするメキシコ系アメリカ人のコミュニティが、スペインによる植民地化、米国の侵攻を経て、チカーノ運動、「カリフォルニオ」(メキシコにルーツを持つカリフォルニア州の住民) としてのアイデンティティを形成するにいたった歴史を学びました。20世紀初頭から、人種による居住区のゾーニング (区域分け) があったこと、1930年代に、Repatriation (本国送還) という名の下、メキシコに移送された人々の過半数が実際は米国生まれであったことを初めて知りました。

メキシコ系アメリカ人、カリフォルニオ、ラティーノとしてのアイデンティティが苦境の中で育まれてきたことを認識するとともに、LAの歴史はラティーノの歴史であり、ラ・プラザを語られなかった歴史を語り、保存するための場にしたいという、創設者

のグロリア・モリナ氏やコミュニティの人々の思いを強く感じました。

現在、当局によるラティーノコミュニティの人々の拘束や送還が発生している中でも、「Aquí estamos, no nos vamos (我々はこちらにいる、どこにも行かない)」という言葉で、静かに連帯を強め、苦境に耐えようとする姿勢が印象的でした。博物館のシンボルとなっているジュディス・バカの絵画 (「La Salsera」) の中で、女性の姿となって集う蝶の姿 (儚さ、外から移り住んできたもの、生まれ変わること、連帯による強さなどを象徴) とリンクしているように感じました。ラ・プラザ入口では、蝶の形のカードに来場者がメッセージを添えて貼付する企画が催されており、連帯、平和、明るい未来への祈りが、コミュニティを越えて広がっていくようでした。

続いて、アルタ・カリフォルニアの最後のメキシコ州知事であったピオ・ピコが所有していた歴史的建造物であるピコハウスとメキシコの著名な画家、ダビッド・アルファロ・シケイロスによる壁画 (「アメリカ・トロピカル」、1932年) などオルベラ街にあるほかの施設を見学しました。修復や復元作業のお話をうかがい、コミュニティが大切にしている場所・記憶を守り、保存するための不断の努力を感じました。



メディアにおけるアジア系アメリカ人の代表性

アジア・太平洋諸島系アメリカ人の映画制作者やメディア・アーティストを支援するNPO、ビジュアル・コミュニケーションズ (Visual Communications) のエグゼクティブ・ディレクター、フランシス・コラドゥー氏、アジア太平洋系エンターテインメント連合 (Coalition of Asian Pacifics in Entertainment) のプログラム責任者、リアン・ムーア氏のお二人にお話をうかがいました。強制収容所の体験者へのインタビューの映像化など、過去へのアプローチだけでなく、フェローシップ・プログラムやトレーニングを通じた、映画制作者の育成・ネットワーク構築の支援といった、次世代に向けたアプローチも行っていることを学びました。映画制作者の中には、経済的問題から、業界を去ってしまう人もいるとのことで、意義あるものを継続して制作することの裏側にある現実的な課題と、人と人とのつながりによって映画制作者を支える、NPOやコミュニティの意義を考えさせられました。



在ロサンゼルス日本国総領事公邸でのレセプション

曽根健孝在ロサンゼルス日本国総領事ははじめとする政府関係者の方々や、カリフォルニア州議員のアル・ムラツチ氏、アルハンブラ市議員のジェフ・マロニー氏をはじめとする日系アメリカ人コミュニティのリーダーとの会食に参加させていただきました。会食前に曽根総領事よりお話のあった「日系アメリカ人の若い世代では、



日系というアイデンティティーが薄れてきている」という点は、日系ブラジル人社会でも見られる傾向で、いかに若い世代をコミュニティの中に巻き込んでいくかが共通の課題と感じました。日本にルーツを持つ方がカリフォルニア州の政治・法務の分野にもいらっしゃるものの、数は今後減少していく可能性があること、総領事館では将来の日米関係の中枢を担う次世代日系人リーダーの育成するプログラム「LAネクスト・ジェネレーション日系アメリカ人リーダー・イニシアチブ」を実施するとともに、南カリフォルニア日系企業協会 (JBA) などを通じ、日系と日本人の若手グループ間のネットワーキングをサポートされていることを知りました。業種の枠に捉われず、日系コミュニティに貢献すること、ネットワークの輪を拡大していくことの重要性を再認識しました。

(文:和島 歩)

7月25日[金] ロサンゼルス第5日(マンザナー)

マンザナー強制収容所跡(マンザナー国定史跡)訪問

このプログラムが今回の研修の一番の山場といっても過言ではありません。

1942年2月19日、フランクリン・ルーズベルトの「大統領令9066号」を受け、西部防衛軍によって西海岸からの日系アメリカ人の強制立ち退きが決定され、日系人が強制収容されることになりました。退去を知ってから収容される日までほとんど時間がなかったため、何を持っていったらいいのか?どんな生活が待っているのか?を知らされることもないまま、出発前に精神を病んでいった人もいたようです。全米に10カ所の収容所が置かれ、約12万5000人(1つの収容所に約1万人前後)が強制収容されました。その中で最もよく知られているのがマンザナー強制収容所です。

ロサンゼルスを早朝に出発し、バスで約4時間かけてマンザナー強制収容所跡に向かいました。ビルが立ち並ぶロサンゼルスのダウンタウンから、段々と建物が消え、次第に砂漠のような風景に変わり、大きな山々が見えるようになりました。バスに揺られながら、「いったいどこに連れていかれるのだろうか?」と不安で心細いような、まるで自分が当時の日系アメリカ人の一人になったかのような気持ちになりました。北アメリカ大陸2位の標高をもつホイットニー山を含む山々の麓にあるマンザナー強制収容所は、とにかく気候が厳しく、この日も40度を超える暑さで直射日光が降り注ぎます。また、風が強く、砂ぼこりが舞っていて、突然これからここで生活していけと言われた人々はどんな気持ちだったのだろうか?と胸が痛みました。冬には雪も降るようです。

今は当時の建物はほとんど取り壊されていますが、マンザナー国定史跡(Manzanar National Historic Site)として整備、保存されています。まず資料館を見学。とても見応えがありました。特に、当時強制立ち退きの際に人々につけられていた番号札を再現したものが、その裏にはその人がどんな人生を歩んでいたのかが書かれていました。彼らが願っていた夢は、マンザナーに來たことで理不尽にいったん中断されることになったのです。その無念を静かに噛み締めました。

その後、跡地の見学をしました。強制収容所跡を訪問して感じたのは、収容所がまさに生活の場になっていたということ。1万人が住むには窮屈でカオスだったマンザナーは当時36区画に区切られていて、1区画に約200から400人が収容されており、米軍によって監視されていました。見ず知らずの数百人が強制的にご近所さんになり、同じトイレや共有施設を使う1つのコミュニティを形成させられました。もちろん収容所内で亡くなった人もいましたが、収容所内で結婚した人もいれば、生まれた子どももいます。プライバシーがない状態での共同生活、共同トイレやシャワーの衛生環境、しかしその環境下でだんだんとクリエイティブになっていった人々の様子も聞いて、当時の悲惨な状況と同時に人間のレジリエンスを感じました。

今回の機会がなければ、ここまで日系アメリカ人の歴史について想いを馳せることはなかったと思います。文章で歴史を読むだけでなく、自分の目で見て、肌でこの場所を感じることで、この歴史が一層自分ごとになりました。同様の文脈で、日本が過去に植民地化した国の人々が辿った歴史もまた学ぶ必要があると感じました。それぞれの国がもつ被害の歴史と同時に加害の歴史があることもまた忘れてはいけないうと肝に銘じたいと思います。

マンザナー閉鎖後の再定住と記録のデジタル化

マンザナー強制収容所は、日本敗戦後の1945年11月に閉鎖されました。とはいえ、収容されていた人の大部分は財産を失い、帰る家もなかったため、できる限り長く収容所に残ることを希望した人もいたと言います。リトル東京など自分たちがいた場所に戻った人もいましたが、そこで一から生活を再建していくことはとても大変なことでした。依然として日系人に対する偏見や差別が残っていたこともあります。環境は悪かったものの、なんとか希望を持ちながらそれぞれの場所でコミュニティを再建していった歴史について学びました。

実は、マンザナー収容所について残っている記録写真のほとんどは、収容者の一人だった宮武東洋さんとアンセル・アダムズさんによって撮影されたものです。宮武さんはもともとLAを中心に活躍した写真家で、こっそりレンズやフィルムを収容所に

持ち込み、木箱でカメラボディを作ってもらい写真を撮っていました。途中カメラを没収されたこともありましたが、後に収容所内の公式カメラマンに指定され、彼の撮った写真は当時を知る貴重な資料となっています。それを現在の技術を用いてデジタル化し、当時の収容所内の様子をより広く伝えるとともに、その写真が撮られた場所を特定するなど調査を進める動きが進んでいます。



ロサンゼルス第6日：ジャパン・ハウス・ロサンゼルス訪問

26日はマンザナーから昼過ぎにロサンゼルスへと戻りました。私たちはこの日、総領事公邸レセプションの際にお会いした海部優子さんが館長をされているジャパン・ハウス・ロサンゼルス(JAPAN HOUSE Los Angeles)を訪問しました。ジャパン・ハウスとは、日本の魅力を世界に発信するために、安倍政権下でロサンゼルス(アメリカ)、ロンドン(イギリス)、サンパウロ(ブラジル)の世界3都市に開設された拠点です。アカデミー賞の授賞式を開催しているドルビーシアターのビルに入っているジャパン・ハウスは、とにかくきれいで置かれているものも洗練されており、バルコニーからみえる景色も圧巻です。ギャラリーではNHKによる「ネオ・ジャポニズム」という展覧会が開催中で、3DCGを使って大河ドラマや日本の国宝が再現されていました。最近では、エミー賞で18部門を受賞した『SHOGUN 将軍』の真田広之さんをお招きしたイベントが特に好評だったそうで、ハリウッドに近い場所にあるからこそこれまで日本に関心があった人、そうでない人の両方を巻き込んで世界のエンターテインメント界に影響を与えられるのだという話をされていました。



(文：矢後千紘)

7月28日[月] ワシントンDC第1日

マンスフィールド財団によるDCプログラムの概要説明

前日のフライト遅延と再びの時差ボケからDCのプログラムはスタートしました。まずはこのフェローシップのワシントンDCにおけるJANMの事業実施パートナーである、モーリーン・アンド・マイク・マンスフィールド財団オフィスにて、フランク・ジャヌーギ理事長・最高経営責任者とディレクター(プログラム担当)のアリ・リー氏より、DCパートの各セッションの概要とおさえておくべきポイントについて説明がありました。前週のLAとは街の雰囲気も訪問先も大きく異なり、不安と緊張も感じている中であり、この事前ブリーフィングは頭を整理する上でも非常に有意義な時間となりました。

アメリカ合衆国国務省東アジア・太平洋局

マンスフィールド財団のオフィスを後にしてまず向かったのは米国国務省です。東アジア・太平洋局のマックスウェル・ハリントン氏、アンディ・ヴー氏、教育&文化局のリンネア・E・アリソンズ氏らと面談をしました。人材交流に関するデータの紹介があり、その資料には日本からアメリカへの留学生数が減少傾向にあることや、世界的ラ



ンキングで日本が13位に位置していることなどが示されていました。同じアジアでもインド、中国、韓国などと比して、日本のプレゼンスの低さが伺えましたが、人と人との交流がひいては国家間の相互協力・理解につながるから大事にしていきたいという言葉に励ま

れました。

また、世界情勢の先行きが不透明な中、特に対中国、北朝鮮、ロシアの安全保障、経済保障の観点でも日米間の連携は重要であることも強調されました。

前政権職員とのランチミーティング

昼食は、前バイデン政権下でホワイトハウスに勤められたジョルジュレット・フルカワ氏、エリカ・ニノユ氏、コウタ・ミズタニ氏を囲んだランチミーティングでした。和やかな雰囲気の中、経験豊富なお三方の経歴、当時の業務内容、アジア系アメリカ人としての活躍のフィールドについてお話を頂きました。印象的だったのは、さまざまな苦労もあっただろう中で、ご自身のマイノリティー性を強みとして認識し活かすことで、多様性の価値を内外に示していたことです。政権が変わるごとに「価値」の定義も変わりますが、きっと、人が好きで人のために真剣になれる集団であることは変わらないのかもしれない、と感じました。



JCIEとNEDとのミーティング

次に、民主主義や国際協力を推進するNPO団体である日本国際交流センター (Japan Center for International Exchange USA, JCIE USA) のエグゼクティブ・ディレクターの加藤和世氏、プログラム・オフィサーのスティーブン・マクヒュー氏、ナショナル・エンダウメント・オブ・デモクラシー (National Endowment of Democracy, NED) のディレクターのダニエル・オマリー氏とのセッションでした。政府による外交とは異なる「民間外交」のアプローチを通じて、国家間の関係強化に貢献する役割につ



いて学びました。変化のスピードが早く、扱うべきテーマも多岐にわたる現代において、NPOが持つ柔軟性や機動力の意義を理解しました。ここでも、人材の交流がもたらす力を信じ、そこに投資することの重要性や価値について議論されました。

スミソニアン・アメリカ建国250周年記念祭準備について

最後のセッションは、スミソニアン協会で活躍される副次官 (特別プログラム担当) のリサ・ササキ氏から、スミソニアン博物館に関する説明と過去から現在においてどんなお仕事をされているか、お話をうかがいました。リサ氏は博物館関係の仕事に30年以上携わっており、日系アメリカ人としてのバックグラウンドも持ち、JANMでの勤務経験もある方です。アジア系・女性というバックグラウンドを持つ文化政策の推進者として多くの実績を残し、現在は、アメリカ建国250周年を祝うUSセミクインセンテニアル委員会のスミソニアン協会代表という重役を担われています。印象的だったのは、一つの博物館が出来上がるのには想像以上に非常に長い時間と労力が必要であること、刻々と移り変わる世界情勢やトレンドも見極め、展示がどのような

メッセージとして来館者に受け止められるのか、という細部にまで心を砕く、ということでした。博物館は単なる展示空間ではなく、社会的メッセージを伝える場であり、文化的対話の場でもあることを改めて認識しました。DCプログラムの後半には実際にいくつかの博物館見学も予定されており、その訪問への期待がさらに高まるセッションとなりました。



マンズフィールド・フェローとのカジュアル歓迎レセプション

DC初日の夜は、マンズフィールド財団オフィスでのレセプションディナーでした。本プログラムの関係者や、マンズフィールド・フェローシップ・プログラムに過去参加され日本での実務研修を経験された方々など、約30名が集まりました。それぞれの渡邊デモクラシー・フェローはLAでの経験を話したり、たまには日本語も交えての対話も楽しみました。長い一日の締めくくりのビールは美味しかったです。



(文: 白倉裕美)

7月29日[火] ワシントンDC 第2日

シンクタンク&学術界座談会

DCでの2日目はシンクタンクの米国ジャーマン・マーシャル・ファンド (German Marshall Fund of the United States) シニアフェローであるサユリ・ロメイ氏、ジョージ・ワシントン大学のシガー・アジア学センターのディレクターであるエリック・シュリュセル准教授、シンクタンクのスティムソン・センター (Stimson Center) のフェローで東南アジアのエネルギーや水資源、サステナビリティについての副ディレクターであるコートニー・ウェザビー氏の3名による座談会から始まりました。

各機関からの概要説明後、それぞれの業務上での役割について説明があり、業務を進める上での課題についてざっくばらんに話をうかがいました。各機関で共通する課題としては、シンクタンクと学術界では政府の政策や政権の意向により、研究テーマの優先順位が変わるため、継続的に同じテーマを研究し続けることは時には困難であることでした。

人によってその受け取り方はさまざまですが、同じテーマで研究をし続けたい人は転職をし、回転ドアのように、シンクタンクと学術界を自由に行き来する人も多いようです。それは幅広い研究テーマを知る機会でもあり、違う研究を始めたい人に取ったら「チャンス」にもなるとのことで、シンクタンクと学術界の独特な世界について垣

間みることができました。

日本ではシンクタンク自体の政府への影響など、そのプレゼンスがアメリカと比較すると限定的であるため、同セクターで活躍している3名のこれまでのバックグラウンドを知ること個人的には非常に勉強になりました。



経団連米国事務所とのミーティング

一般社団法人 日本経済団体連合会 (経団連) 米国事務所の和田照子所長より米国事務所での具体的な活動、およびアメリカでの日本企業との協力、連携等におけるお話をうかがいました。アメリカの「連邦制」では各州による自治権、州法が存在するため、日本企業にとっても各州との関係性構築が重要であり、経団連では定期的に州知事との面会機会も設けている点が印象的でした。

和田所長ご自身はこれまでフルブライト奨学生としてジョージタウン大学ロースクールをご卒業されており、ボランティアとしてガールスカウト活動にも長年関わっておられ、日本連盟のみならず世界連盟でも理事を務められていました。各フェローに対しても一人ひとりの意見に対して耳を傾け、今のアメリカの情勢を踏まえ、どのように経団連として考えていくべきか、自由に討論させていただいたのは大変貴重な機会でした。



在米日本国大使館でのランチレセプション

在アメリカ合衆国日本国大使館旧公邸にお招きいただき、大使館職員の皆さんをはじめ、米日カウンシル、TOMODACHI イニシアチブ等に関わる日系アメリカ人、およびマンスフィールド財団プログラム卒業生等との交流レセプションに参加させていただきました。既にパネルディスカッションや講義等でお会いした方々もいらっしやった中、改めて少人数での対話を通して一人ひとりとのネットワークを構築することができました。中長期的にもこのつながりを大事にしていきたいと思います。



スミソニアン・アメリカ美術館での「ピクチャーズ・オブ・ビロンギング」展

この日の最後に、スミソニアン・アメリカ美術館 (Smithsonian American Art Museum) に、ミキ・ハヤカワ、ヒサコ・ヒビ、ミネ・オオクボの3名の日系アメリカ人芸術家の作品が展示されている、JANMの巡回展「ピクチャーズ・オブ・ビロンギング (Pictures of Belonging)」をキュレーターのメリッサ・ホー氏の案内のもと観に行きました。3名は第二次世界大戦前から芸術家として活躍しており、第二次世界大戦中のみならず、前後も含めた作品が展示されており、それぞれのキャンプでの経験について芸術を通して知ることができました。言葉では表すことができない独特な世界感を体験することができたのは非常な貴重なものとなりました。



(文: 柴田莉沙)

7月30日[水] ワシントンDC第3日

連邦議員オフィススタッフとのミーティング：ダン・サリバン連邦上院議員（共和党、アラスカ州選出）の国家安全保障担当補佐官のウォルター・ローマン

ワシントンDCでの3日目午前はキャピトルヒルでどのような政策議論が行われているのか、とりわけ連邦議会スタッフがどのような関心を持っているのかに触れる貴重な機会となりました。この日は日米の関税交渉の合意から数日経ち、いまだ日本政府の発表した対米投資5500億ドルに対する関心が高い時期でした。特に、今回訪問したウォルター・ローマン氏は元アラスカ州司法長官・天然資源局長を務めたアラスカ州選出で共和党のダン・サリバン上院議員のスタッフで、アラスカにおけるLNGプロジェクトに関する日本の投資に関する議論が活発になされました。フェローの中からは、LNGプロジェクトの採算性や輸送課題などを懸念する意見が上がる一方、同氏としては実現に強い意欲を持っており、日本の対米投資が依然米国内でも重要な関心事項であることを実感できました。

**連邦議員オフィススタッフとのミーティング：マーク・タカノ連邦下院議員（民主党、カリフォルニア州選出）の立法ディレクター、エイドリアン・カストロ**

一方、その後訪れたエイドリアン・カストロ氏は、カリフォルニア州選出で民主党のマーク・タカノ下院議員のスタッフで、同議員がアジア系初のゲイであることを公表している議員であること、また教育界出身であることなどをきっかけとした話が多く、民主主義の価値やマイノリティーの権利、教育の重要性などについて議論しました。



今回の訪問は米国政治の一端を垣間見たに過ぎませんが、短時間でも、経済政策を重視する姿勢と、社会的正義や格差是正などを重視する姿勢など、共和党議員、民主党議員それぞれの意見を聞いたことは非常に意義深い経験になりました。

議会調査局の座談会

その後、党派に偏らず中立的な政策研究機関として活動する議会調査局（Congressional Research Service、CRS）を訪問し、アジア関連スペシャリストのマーク・マニエン氏、国際貿易&金融アナリストであるカイラ・キタムラ氏、外交問題アナリストのダニエル・ロンゴ氏から、議員や委員会に対して幅広い分野で専門的な調査・分析を提供する意義と、その業務の難しさについて学びました。伝統的にシンクタンク、学界からの政策提言やアドボカシーの文化が強いアメリカ政治において、機密性を保って信頼性の高い助言を、議員からの要請ベースで行う立場の特殊性に多くのフェローが関心をもって、日本の政策意思形成と比較していました。



ワーキングランチ:キャピトルヒル政策ブリーフィング

ランチの時間帯にはマンスフィールド財団とアジアソサエティー (Asia Society) によるポリシーブリーフィング「関税交渉と米中競争の狭間で、インド太平洋の同盟関係はどこに位置するのか?」が行われており、米中対立下でのインド太平洋、とりわけQUADの国々の連携の意義について活発に議論が行われていました。関税交渉合意の直後で日本や韓国に対する関心の高まりを感じるとともに、午前中のウォ



ルター氏訪問の際にも話題に上がったアラスカでのLNGプロジェクトの実現可能性についても議論されており、改めてキャピトルヒルという議員関係者が活発に出入りする環境でNPOからの積極的な情報発信を行う有効性を認識することができました。

APIA ヴォートとのミーティング



キャピトルヒルを離れた後はAPIA ヴォート (APIAVote) という、アジア系・太平洋諸島系アメリカ人 (AAPI) の政治参画を促進する非党派のNPOのポリシーディレクターのボブ・サカニワ氏、副ディレクターのケビン・ヒラノ氏と意見交換を行いました。同団体

は選挙登録、投票啓発、若者育成、誤情報対策などを通じて、AAPIコミュニティの声を政治に反映させることを目指しており、少数派であっても地方政治のレベルから、

大きな選挙結果にまで大きな影響を与えられるということを積極的に情報発信していました。人口減少が進む中で少数派となる日本の若者の積極的な政治参画にもつながられそうな、実践的な取り組みをいくつも行っていたことが印象深く、少数派の政治参画という分野においても日米で協力できる可能性があるのではないかと感じました。

コロンビア特別区 (ワシントンDC) キンバリー・バセット ト区長秘書官とのミーティング

この日の最後にはワシントンDCの区長秘書官であるキンバリー・バセット氏と面会しました。ワシントンDCは、米国の首都でありながら、州ではないという特異な地位にあり、住民には連邦議会選での投票権がありません。一方で、各国の大使館が集中し、外交・国際交流の拠点として機能しています。特にDC政府は、都市や州レベルでの国際連携を重視する「サブナショナル外交」に積極的で、他国の自治体や国際機関との協力を通じて、地域課題の解決や文化交流を推進しています。面会ではワシントンDCの地域的な特異性とそのジレンマについて学ぶとともに、有色人種の女性としてワシントンDCをけん引するバセット氏のパワーとパッションに触れることができました。



(文:河野美紗子)

7月31日[水] ワシントンDC第4日

国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館

最終日はスミソニアン博物館・美術館の一つである国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館 (National Museum of African American History & Culture, NMAAHC) の訪問からスタートしました。2016年、バラク・オバマ大統領もスピーチを行ったセレモニーでオープンしたNMAAHCは19あるスミソニアン博物館・美術館の中で最も新しいものだそうです。

地上4階、地下3階の巨大なミュージアムの中、今回私たちが見学したのは地下のヒストリーギャラリーの部分です。地下に向かうエレベーターの窓から見える数字が「TODAY(現在)」から「1400」まで徐々に下がっていく演出により、黒人が奴隷としてアメリカ大陸に運ばれてきた時代に自分たちが遡っていくことが示されていました。地下3階から1階に向けて時代が進む展示の中で、いかに黒人奴隷が非人道的な環境に置かれてきたか、その中でどのように自分たちの文化を守ってきたかの歴史が、テキスト・写真・造形物・映像などによって表現されていました。中には、黒人の使用エリアには露骨な機能差があった列車の車両の展示などダイナミックな展示物もありました。



アムネスティ・インターナショナルUSAとのミーティング

アムネスティ・インターナショナルUSAでは、デベロップメント・ディレクターのアドティ・アクウェイ氏が私たちを迎えてくれ、政府関係&アドボカシーのナショナルディレクターであるアマンダ・クラシング氏、立法コーディネーターのエボニー・マックリース氏、ボードメンバーのジャック・レンドラー氏らをリモートでつないでのディスカッションが行われました。

1961年に設立され、ロンドンに本部を置くアムネスティ・インターナショナル。アムネスティ・インターナショナルUSAでは120人の有給スタッフと250人の会員リーダーが、70のセクションに分かれ120の国での活動をサポートしています。

現在の主要な活動テーマは、イスラエルのガザ攻撃において米国の武器が国際法に反して使われていることだそうで、衛星写真等の証拠写真を人権侵害の証拠とし、議員などに訴えに行くなどの活動をしています。トランプ大統領による現政権になり、USAIDがカットされたことによる国際的支援の難しさや、さまざまな人権課題を扱ってきた国務省のスタッフ削減など、活動への逆風についても赤裸々な声が聞かれました。

報道機関の人間として、私が「人権のためにメディアができることは？」と質問すると、ジャック氏は力強い言葉でこう答えました。「人権問題を伝えること。大衆の興味に沿ってトランプ大統領の言い分をそのまま伝えるのではなく。公共放送への連邦予算のカット



など、政権の思うようにナラティブをコントロールするための情報への攻撃が起きている。異なる (alternative) 声を伝えることが大切です」。

締めくくりの言葉はさらに印象的でした。「のちに、『人権は2025年までだったね』と思いつく日が来るかもしれない。人権がある今は、歴史の中の一ページかもしれない」。私たちもこの言葉を胸に刻み、民主主義と人権が守られ続けるよう、自ら行動することの重要性を自覚しました。

ヒューマン・ライツ・キャンペーンとのミーティング

今回の旅の最後のセッションとなったのは、全米最大のLGBTQアドボカシー団体であるヒューマン・ライツ・キャンペーン (Human Rights Campaign) でした。資金調達部門のデイビッド・ユース氏、連邦政策担当のデイビッド・ステイシー氏、そしてリモートで訴訟担当のシンシア・ウィーバー氏が加わり、彼らの活動について聞きました。

全米に360万人の支援者を持つヒューマン・ライツ・キャンペーンでは、自ら算出した「自治体平等指数」を通じた連邦・州・自治体でのLGBTQ当事者議員や支援議員や政策成立のサポート、「企業平等指数」を通じた企業でのLGBGQ従業員の支援や差別の禁止を推進していて、例えば連邦政府が契約する企業や団体でのLGBTQの雇用保護を定める大統領令などを実現してきたそうです。

現在の団体の活動は、トランプ政権の明確な反LGBTQ的アジェンダに大きくフォーカスしている印象を受けました。例えば、連邦全体での同性婚の合法化が覆った場合に備えて州ごとの制度制定に備えるなどのアクションが聞かれました。デイビッド・ステイシー氏は「トランスジェンダーのスポーツ参加以外については、LGBTQをサポートする方向で世論は一致している」とした上で、自殺防止のサポートをしてきたナショナル・スイサイド・ホットライン (National Suicide Hotline) や、高齢LGBTQ支援団体への予算がカットされるなど、アウトリーチ施策の中でマイノリティーグループ向けのものが削減されているという苦しい現状について語りました。

対談の最後に、デイビッド・ステイシー氏はこう語りました。「時計は戻せない。我々のアドバンテージは、全てのアメリカの家族は近いうちにLGBTQの家族を持つこと

になることだ」。統計的に必ず生まれるLGBTQ当事者が自分の家族にいない人はやがていなくなる……考えてもみなかった視点と伝え方に、40年以上にわたって人権活動の最前線で闘う人々の逞しさ、知恵、パワーを感じました。



送別レセプション

最終日、マンズフィールド財団のオフィスから間近のレストランで、送別レセプションが行われました。DCプログラムをサポートしたマンズフィールド財団関係者、訪問した各所の皆さん、在DC邦人コミュニティーのメンバーとのさらなる交流を持つことができました。

後半では、フェローのメンバーたちがこの旅の学びをスピーチし、それぞれの誓いを新たにしていました。一人ひとりの堂々とした姿から、この2週間のプログラムで成長した姿を見せられたのではないかと、信じています。



(文: 白川大介)

訪米プログラムを終えた各フェローの感想

石森孝志

マンザナー強制収容所への訪問、幼少期に三世として強制収容を経験した方との対話を通じて、戦時中、戦後の日系人の努力が彼ら・彼女ら自身の社会的地位を向上させただけでなく、その後に続く移民によるアメリカ国内の市民権獲得の橋頭堡となったと感じました。差別・偏見が激しかった土地において、日系企業が米国企業と同様に企業活動を継続できること、また、移民や海外出向等において不自由なく生活できる状態があるのは、過酷な生活に耐え忍んだ日系人の苦悩や犠牲の上に成立していると考え、先人の歴史に思いを馳せずにはいられません。

現代の日本国内で生活する私たちにとって、普段自分自身の権利を意識することはないのではないのでしょうか。日系に限らず、アメリカへの移民の歴史・体験談に触れるにつれ、市民権や投票権・参政権、同じ人間として尊厳を持って扱われることが所与の権利ではなかったことを、多くの場面で再認識させられました。リトル東京やオルペラ街では、自分自身だけではなくNPO・NGOといった組織単位及びコミュニティ全体で構成員の権利を獲得、維持、支援をする努力が今もなお継続されている姿が見られ、それがコミュニティとしての連帯感を一層強めていることも、訪米プログラムを通じて感じた大きな収穫の一つです。

ABC7やワシントンDCのNGOとの面談では、不法移民の強制送還やUSAIDの人道支援・経済開発に資する補助金の削減等、現政権の経済重視政策の弊害があらゆる場面で表面化していることが強く感じられました。これらのステークホルダーに共通していたのは、自らの使命や組織の存続のために、やるべきことを愚直に継続すること、新たな知識や専門性を身に付けることの重要性を明確に認識していることでした。特にABC7では、メディアの多様化やフェイクニュースの台頭に対し、自らが信頼され続けるメディアであるために「絶えず現場に顔を出すこと」を重視している点が印象的でした。信念を貫き通すこと、自身の取組・活動を継続することは、戦

後の日系人の努力及び権利を獲得してきた歴史と多くの共通点があります。継続によって自身の発言や行動に一層の信頼・説得力という価値が増大する、それを体現されている方々との対話は大きな刺激をいただく貴重な機会でした。

本訪米プログラムを通じて、日系アメリカ人の歴史のみならず、その他マイノリティー・エスニシティグループによる取り組みに触れることで、米国内での多様性が力強く支えられていることを理解することができました。多様性やマイノリティーに関する 이슈が取沙汰されている今日の米国でこそ、これらの取組や努力がより一層緊迫感や重要性を持っていると感じることができました。

今年参加した8名のフェローは4名が公的機関、4名が民間企業に所属しており、担当業務も多岐に亘ることから、フェロー間の多様性も大いに感じとることができました。フェロー同士の何気ない対話においても、多様な経験を持つこと、また、それらを共有することでグループとしての強みになるということをこの訪米プログラム中に感じたことは、極めて意義が大きいものだと感じています。

訪米プログラムを通じて、民主主義とは組織における意思決定のシステムであること以上に、自身のコミュニティや世代だけではなく、他のマイノリティーグループ、こどもや孫の世代を豊かにするための想いに根差した社会のパワーであると感じました。対話を通じて人々の職務に対する価値観や使命感に触れる中で、組織を牽引するための姿勢、強い想いがもたらす信念の価値、それを周囲に伝えることで組織を良い方向に導くことのできるリーダーを目指したいという想いを新たにしました。



河野美紗子

2025年7月末から8月初旬にかけて、米国ロサンゼルスとワシントンDCをそれぞれ1週間ずつ、計2週間にわたり視察する機会をいただきました。ロサンゼルスでは、地域コミュニティに根ざした民主主義の実践や、社会的連帯に向けた取り組みを学ぶ一方、ワシントンDCでは、それらの草の根の活動が、ホワイトハウスや連邦議会における政策立案や意思決定にどのように結びついているのかを知ることができました。

今回の視察は、トランプ政権が再び発足して半年ほどが経過したタイミングで行われました。内政・外交ともに日々新たな動きがあり、短い滞在期間ながらも、その社会的影響を肌で感じることができました。

ロサンゼルスでは、全米日系人博物館の運営のもと、日系人コミュニティの歴史と現在について学びました。特に印象的だったのは、戦時中に日系人がマンザナー強制収容所へ送られた際のルートを、博物館前の道路からバスに乗って実際にたどることができたことです。突然の移動命令により、行き先も告げられずにバスで長時間運ばれた当時の日系人の不安や恐怖を想像すると、胸が締め付けられる思いでした。そして、現在の米国においても、数多くの移民が強制送還に直面している状況は、形は違えど同様の不安を抱えているのではないかと、歴史と現代の皮肉な類似性を感じました。

中米からの移民コミュニティの方々とも対話する機会がありましたが、想像以上に社会的分断は深刻でした。何世代にもわたり米国に住む移民と、近年入国した移民との間でも、現政権に対する意見は大きく異なり、同じ家庭内でさえ政策への見解の違いから対話が困難になることもあるそうです。アジア系移民の中でも、中国系、韓国系、日系といったエスニシティごとに立場が異なり、人種だけでは語れない複雑な分断が存在していることを実感しました。特にロサンゼルスでは、いつ当局に滞在許可の有無を聞かれても大丈夫なよう、常に身分証を携帯することを勧められるなど、厳しい環境にあることも印象的でした。

ワシントンDCでは、全米日系人博物館とマンスフィールド財団の協力のもと、国務省や連邦議会関係者、NPO、学術関係者など、幅広い分野の方々との意見交換を行いました。短い滞在期間の中で、ロサンゼルスほどの社会的な切迫感は感じられ

なかったものの、DOGEによる各種政策の縮小や人員整理など、先行きの見えない状況に対する不安が広がっているようでした。特に印象的だったのは、「現政権に対してどのように働きかけるべきか」「そもそもアドボカシーに意味があるのか」といった徒労感が広がっていたことです。ホワイトハウスで一方的に決定される政策に対し、議員やシンクタンク、大学、NPO、活動家たちがどのように反応すべきか分からず、対話が成立しない状況が生まれていました。

なお、こうした分断を助長している要因の一つが、インターネットや新興メディアによるディスインフォメーション(意図的に作られた虚偽情報)だと思っています。スマートフォンを通じて誰もが情報を得られる時代において、アルゴリズムによって自分にとって心地よい情報ばかりが表示される「エコーチェンバー」状態が常態化し、意見の極端化が進んでいることに対する懸念が視察中数多く聞かれました。そして、異なる意見を持つ人との対話がますます困難になっており、分断をあおるような政策が実行されることに強い危機感を覚えました。

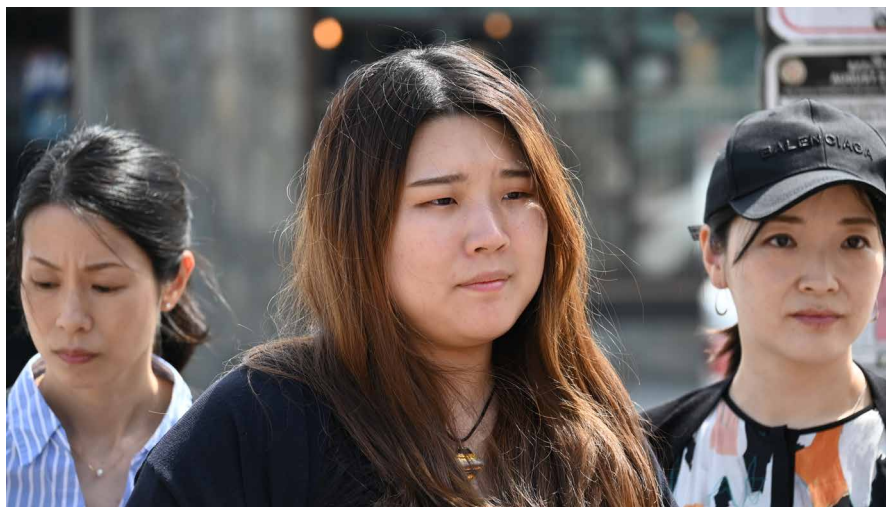
社会的分断は米国だけの問題ではありません。日本においても、ポピュリズムの台頭や移民問題、世代間格差など、さまざまな分断が顕在化し始めてきていると感じています。こうした状況の中で、分断に目を奪われるのではなく、いかに社会として連帯できるかが今後ますます重要になると感じました。似た考えを持つ人同士で集まり同調するのではなく、異なる意見や時には極端な考えを持つ人々の声にも耳を傾け、真摯に対話を試みる姿勢が求められているのではないのでしょうか。

また、そうした人々がどのようなコミュニケーション手段を用いているのかを理解し、一方的な情報発信にならないよう自分自身の考えや感じていることをどのように伝え、受け止めてもらえるかを模索することも重要だと痛感しました。

私は現在国際交流基金という組織の国際対話部という部署で働いており、政策指向性を重視した日本と諸外国との対話事業の実行支援を担当していますが、今回のプログラム参加を通じて、双方向での対話、とりわけ異なる意見を持つ人と辛抱強く交流を続けることの重要性を実感することができました。私が好きなとある映画の一説に、「Listening is Loving(聴くことは愛すること)」というフレーズがあるのですが、分断が加速する今だからこそ、異なる意見を持つ人の話を積極的に聴きに行き、その背景にどのようなロジックや背景事情があるのかを知り、寄り添って初めて、互い

に納得できる着地点を見出せるのではないかと思います。

最後に、本プログラムを通じて、多様なバックグラウンドから来るフェロー、同じ問題意識を持つ仲間、異なる立場の方々と関わり、今後につながるネットワークを築くことができたことは、大変意義深い経験でした。この貴重な機会を寛大に支援してくださった渡邊利三氏、そしてコーディネートをしてくださった全米日系人博物館、マンスフィールド財団の皆様に改めて心より感謝申し上げます。



関本さと

本プログラムに参加した大きな動機は、世界が大きな変化の時を迎えている今、移民で成り立つアメリカ社会の実態を学ぶことで、社会が複雑化する日本において、多様性が尊重される社会はどのようなものかを知り、考えたいということでした。

米国社会は多様な民族から成り立ち、民族を中心として物事が語られることが多いのですが、訪米プログラムに参加し、さまざまな団体等からお話をうかがい、ディスカッションする中で、政治参加率が低い、もしくは特定の産業でプレゼンスが低いなどの事象がある際に、それぞれのエスニック・マイノリティーに対して活動をするNPO団体があり、民間団体の努力によって多様化とインクルージョンが実現されてきている一面があると感じました。DEIは、これまでも時代によって推進されたり、逆風を受けたりすることはありましたが、どのような状況においても、今まで築き上げてきたものが一気になくなるわけではなく、社会が多様化することを重要だと認識する人々の活動が脈々と続いていると感じました。

また、この訪米プログラムは、民主主義についても、立ち止まって考える機会となりましたが、これもまた多様な社会の在り方を考えるうえで重要でした。米国では、デモクラシーという言葉が、日本で考えられているより、幅広い意味を持って語られているようですが、訪米プログラムで、主に、日系、ラテン系、アフリカ系アメリカ人の歴史やコミュニティについて学ぶ中で、人々が、過去に繰り返されてきた民主主義に反するさまざまな過ちの歴史を伝え継ぐことで、同じ過ちを繰り返さないようにすることがいかに重要であるかを理解し活動しているという印象を受けました。また、社会の中にあるさまざまな差別等に対して人々が声をあげ、そうした声をNPOなどが組織的にまとめ、立法府に届けるという、社会の構成要素の一つ一つがしっかりしているとも感じました。

いずれのテーマにおいても、個や民の力が非常に大きく、こうした力が社会を動かしていると感じました。日本においても、社会の構成員や取り巻く環境が変わっていく中で、草の根の文化交流や多文化理解の活動を絶やさない環境とはどのようなものか考えたいと思いました。

最後に、今回のフェローシップには、さまざまなバックグラウンドを持つ8人のフェローが参加しており、プログラム中のディスカッションを通して、また2週間を共に過ごす中で、さまざまな考え方や価値観に気づくことができました。このような小さなフェローのグループ間であれ、民族間であれ、都市間・国家間であれ、こうした人と人とのつながりに基づく相互理解が、多様性が尊重される社会の根本であることを改めて感じる機会となりました。



柴田莉沙

私は現在ラオスに2年滞在しています。ラオスは東南アジア内陸に位置する社会主義国家であり、少数民族も多く住んでいるものの、おおよそ全人口の半数以上がラオ族です。そのような環境で主に教育分野における国際協力に関わる中で、改めて民主主義、多様性について考えることが多く、その中で渡邊デモクラシー・フェローシップを見つけました。

学生時代ニューヨーク、カリフォルニアと計2年間アメリカに留学をしていました。授業では学生が自由に議論する機会が豊富にあり、また多様なバックグラウンドの学生と知り合うことができ、自分自身の価値観や進路について考えなおすきっかけになりました。そのような経験を振り返る中で、渡邊デモクラシー・フェローシップの訪米プログラムを通して、違う視点から今の自分を見つめなおすきっかけができればと思い、応募に至りました。

大学院卒業後、国際協力のキャリアを進んで7年目になりますが、フェローシップを通して、一番大きな学びは日々のフェローとの意見交換を通しての気づきでした。私のようなパブリックセクター出身者以外にもプライベートセクターからも金融、メディア、メーカー等幅広くフェローが参加していたため、同じ視察先を回っていても、気づきの点が全く違い、それぞれの視点からの学びを聞き、意見交換できるのがとても貴重でした。

フェローシップを通してさまざまな視点から日米関係を学ぶ機会がありましたが、中でもアジア系アメリカ人との交流、及び日系アメリカ人の歴史についての学びが印象的でした。私自身幼少期はオーストラリアで過ごし、その後も留学、駐在等でアメリカ、タイ、エチオピア、ラオスと日本出身でありながらも、海外に住む経験が多かったため、自分自身が「マイノリティー」として過ごす機会を度々経験してきました。日本に帰国後も「帰国子女」というレッテルを貼られ、第三者からは「英語ができるから」とポジティブな意味で言われることであっても、自分自身は周りと比較してしまい日本語に対しての劣等感を感じることも多々ありました。

ジャーナリストの皆さんからお話をうかがった際、ABC7にてニュース・ディレクターをされているパム・チャン氏が、「女性だから、アジア人だから、自分自身がキャリアの

中で悩むこともあったが、アジア系アメリカ人ジャーナリスト協会等の先輩から日々アドバイスをいただきながら、自分自身の信念を持ちつつ、自分らしさを大事にし、仕事をしている」という言葉がとても力強く、アメリカのような多民族国家で生きていく上で、時には不利な状況に置かれたときがあったとしても、力強く生きてきた姿がまさにロールモデルで、業界は違いますが、「自分らしさを追求していきたい」と後押しされました。

また、日系アメリカ人の歴史について学ぶ中で、マンザナー強制収容所跡を訪れました。そこは第二次世界大戦中、1万人以上の日系アメリカ人が収容されており、戦後同収容所は閉鎖したものの、多くの人々が財産・家を失い、元の生活に戻ることは困難でした。主に日系一世が収容所の環境改善を自ら行い、日系二世である子どもたちに不自由が無いよう教育機会を与えました。アーカンソー州のローワー強制収容所に実際に収容されていたジューン・アオチ・バーク氏からの話で、「自分自身は子どもだったから、いまいち状況をわかっていなかった。友達と学校に行き、スポーツをし、置かれた状況の中で楽しんでた。しかしキャンプを出た後、両親は一切収容所の話をしなかった。一度だけ話す機会があったが、その時母は泣いていて、言葉が出てこなかった。初めてその時に両親が抱えていた心理的ストレスを少しだけ理解できた」と涙ぐみながらお話しされていたのが印象的でした。

多様性を考えていく上で、違いをどう受け入れていくのか、というのは現代社会においても大きなテーマの一つだと思います。ただ、今回のフェローシップを通して改めて「自分らしさ」を見つめなおす大きなきっかけになりました。日本のみならずラオスの教育に関わる中で若い次世代の子どもたちにも「自分らしさ」を大事にしていきたいことを伝えていきたいと思っています。



白川大介

LAから車で4時間。再現されたバラックから、遠いシエラネバダ山脈との間には、ひたすらの「荒涼」が広がっていました。記者としてさまざまな人々の思いを伝えてきましたが、83年前、理不尽にすみかを追われ、このマンザナーの地に縛られた日系アメリカ人たちの心持ちには、どんなに想像力を巡らせても届かないように思いました。

——自由の危機に、自分には何ができるだろう？

それは、この旅の間、私の頭の中で繰り返された問いでした。

*

遺物を未来に残す人々は、歴史を知ることが悲劇を繰り返さない方法と知っていました。収容所で暮らした「子どもたち」の明るい記憶の奥には、心配をかけまいとする大人の必死の努力が滲んでいました。研究者は、学术界にマイノリティーが正当な分野を持つことの大切さを説きました。リトル東京の街並みを鉄道建設から守ったのは、コミュニティーの団結の力でした。困難な環境に生まれ更生しようとする人を支えるのは、自らもそこから立ち直った仲間でした。移民のため闘う法律家は「諦めは選択肢にない」と言い切りました。時に「嘘つき」呼ばわりされるというジャーナリストたちも、「それでもやるべきことをやるだけだ」と決意を示しました。デジタル技術に秀でた若者が1枚の写真から発掘したのは、家族の愛に溢れたある日の思い出でした。

官僚たちは、草の根の国際交流が平和の礎だと口を揃えました。前政権でマイノリティー政策に関わったブレーンたちは、「今は無職で～す♡」とジョークを飛ばしながらも、情熱の炎を絶やしていませんでした。スミソニアン博物館のディレクターは、片方の視点だけで歴史を捉える危険性に警鐘を鳴らしました。米国経団連の女性リーダーは、荒波のなか健全な経済活動を守るため必死に舵を切っていました。共和党と民主党、それぞれの政治家のそばで働く人が、正反対の信念のもとに、それぞれに国を良くしようとしていることを知りました。マイノリティーの政治参加を支援する団体職員は、「考えが違っていても政治について議論できる」と自信を見せました。DC特別区のパワ

フルな黒人女性リーダーは、多様な住民が都市の力だと確信していました。世界的人権団体の幹部からは、「いま行動しないと人権そのものが守られない日がある」と活を入れられました。性的マイノリティー支援グループからは、「それでも時計の針は戻せない」、世界は良い方向に向かって進み続ける、と背中を押されました。

*

集合時間が近づき、マンザナーの資料館を去ろうという時、ある物がふと目にとまりました。1942年当時、ここで配布されていた新聞のレプリカには、今日の新聞に書かれていても全くおかしくない言葉が綴られていました。

「噂は怠惰な心から生まれ、簡単に倍増してしまう。(中略)その大きな原因が『確かな情報源の欠如』にあると気づいたからこそ、この新聞が誕生した。(中略)」

私たちは、アメリカ民主主義の歴史に前例のない「実験」の当事者である。進展の多くは未知の領域を通らねばならない。だからすべての答えをすぐに示すことはできないし、答えは歩みの中で初めて見えてくるものだ。

しかし私たちは、世界とアメリカの人々が問うている答えを示していく。この地で民主主義の理念が試されているのだ。私たちの行動と姿勢によって、自由人としてのこの世代、そして未来の世代への責任を負うことになる。

*

実施2年目を迎えた渡邊デモクラシー・フェローシップ。皮肉なことに、昨今の世界情勢の中でこのプログラムの意義は逆説的に、そしてますます重要性を増しているといえるでしょう。83年前と同じく「民主主義の理念が試されている」いま、自由と多様性を守るため、フェローの一人として、ジャーナリストとして、市民として、私は自分の責任を果たしていきます。



白倉裕美

2025年度フェローとして参加した2週間の訪米プログラムを振り返り、改めてこの経験がいかに貴重であったかを実感しています。日系アメリカ人の歴史を軸に、民主主義の価値や日米間の理解と協力を促進するという本プログラムの理念のもと、多様な人々との出会いと対話を通じ、視野が大きく広がりました。

プログラムを通じて多くの学びがありましたが、特に印象に残ったのは、まず、アメリカにおけるNPO／NGOの存在感とその社会的影響力です。ロサンゼルスのリトル東京コミュニティをはじめ、移民の法的権利擁護を中心に活動するアカシア・センター・フォー・ジャスティスや、元ギャングの社会復帰を支援するホームボーイ・インダストリーズなど、さまざまな団体と対話する機会がありました。法人税や地方税が免除される税制優遇制度やアメリカに根付く寄附文化に支えられた持続可能な仕組み、そして活動が個人のアイデンティティと深く結びつき、強いリーダーシップにつながっている点に深く感銘を受けました。日本では「非営利＝ボランティア」という印象が根強い中、アメリカでは社会変革の担い手としての姿が際立っていました。

また、DEIの意味合いの違いも大きな学びでした。アメリカでは、17世紀以降の移民の歴史を背景にDEIは長い歴史を持ち、人種と密接に結びついています。1950年代から1960年代にかけて展開された公民権運動の実績も、現在の多くの活動の土台となっています。一方、日本では女性活躍やLGBTQといったテーマが中心で、法制度の整備もこの10年ほどと比較的最近です。同じ「DEI」という言葉で語られ、さまざまな議論がされていますが、両国の歴史的・社会的背景や社会への浸透度、影響を踏まえると、似て非なるものであることを実感することが出来ました。同時に、「DEI」と一括りにして語られ、整理されることの危うさも感じました。

さらに、マイノリティーコミュニティ間の連携のあり方にも日米の違いをみました。UCLAアジア系アメリカ人研究センターとのセッションでの「一つ一つは小さな集まりでも、力を合わせることで声を上げることができる」という言葉が印象的でした。日本では各マイノリティーが個別に活動する傾向が強い中、アメリカでは連帯によって社会に働きかける姿勢が根付いており、今後の日本にとっても示唆に富むものでした。

このプログラムのもう一つの魅力は、異なるバックグラウンドと視点を持つ8名のフェローとの出会いです。勤務先（民間、公的機関）、関心分野、海外経験の有無、家族構成などが多様でありながら、その多様性を自然に受け入れ合えるグループでした。同じ体験をしても受け取り方が全く異なり、自分の「当たり前」が「当たり前」ではないことに気付く、価値観の再構築や視野の広がりを実感する大変貴重な機会となりました。

2週間の経験がすぐに明日からの業務に活きたり大きな変化をもたらすものではありませんが、確実にアンテナが高まり、将来のキャリアや社会との関わり方に影響を与えるきっかけになっています。プログラムを通じて美術館や博物館を訪れる機会も多く、（これまで決して関心が強くなかった）アートへの関心が芽生えたことも、思わぬ副産物でした。

最後に、情勢的に難しい調整が続いた中で、完璧なプログラムを提供してくださったJANMやマンスフィールド財団の皆様、訪問先の関係者の方々、そして本プログラムへの参加をサポートしてくれた職場の同僚と家族に、心より感謝しています。



和島 歩

米国では、民族や人種に留まらない、さまざまなコミュニティがあり、それぞれが「語られていない歴史・記憶」を原体験として共有していることを知りました。特に印象的だったのは、第二次世界大戦下を強制収容所で過ごした日系アメリカ人お二人のお話と、マンザナー強制収容所の跡地で見た光景です。住環境や医療・食料も万全でない中、日系一世・二世の方々は、子どもたちがなるべく日常と変わらず過ごせるように努めていた、という話に、心を動かされました。

それぞれのコミュニティの歴史を正しく保存し、過去を繰り返さないという決意を、リトル東京やグレートウォール・オブ・ロサンゼルス、ラ・プラザ・デ・クルトゥラ・イ・アルテス、スミソニアン博物館など、訪問先の展示・記録の数々から感じました。同時に、真の自由や平等を獲得するための無数の苦闘が、今日の米国の民主主義や多様性を形づくってきたことを学びました。

世界や米国内の情勢が大きく変わる中でも、下を向かず、コミュニティメンバーを助けようと行動する姿に、コミュニティが培ってきた絆の強さを感じました。また、政府、議会、NGO・NPO、シンクタンク、民間企業、メディアなど、異なる立場の人々が、各々の立ち位置から、民主主義のシステムに自ら参画し、民主主義を成し遂げようとしている点が印象的でした。

日米関係は一朝一夕で築かれたものではなく、日本への興味・関心・熱意を原動力とした、一つ一つの対話を通して築かれてきたものだ実感しました。一回の会話の影響力や People to People Connection (人と人とのつながり) の力強さをこのプログラムを通して学びました。

このプログラムから今後に活かしていきたいことは次の三点です。一点目は、「日系コミュニティへのエンゲージメントを高めていくこと」です。米国やブラジルでは、若い世代のつながりがやや希薄になっている面がありますが、日系人の歴史やそこから生まれた決意を後の世代に受け継ぐことが重要だと感じました。また、民間セクターとして、ビジネスを起点として、人と人とのつながりを構築していきたいと思いました。

二点目は、「コミュニティや社会へのコミットメントを深め、日本企業のプレゼンスを上げること」です。経団連米国事務所では、米国各州での講演や州知事との面談を通じ、日本企業への理解(米経済に貢献していること)が深まるような働きかけを行っているとうかがいました。日米関係や日伯関係における相互理解の促進・関係強化にも寄与すると信じ、日系コミュニティに貢献し、日本企業のプロファイルを上げるための活動を意識していきたいと思います。

三点目は、「多様性を受け入れるだけでなく、企業が多様であるために行動するリーダーであること」です。今回、プログラムでお会いした素晴らしいリーダーの方々や、フェローの皆さんとの対話から、女性のエンパワメントやコミュニティメンバーを支援するための行動のあり方を学びました。税制変更やコミッティーの開催といった、多くの人に対するものから、悩みを共有するためのコミュニケーションスペースの提供といった、より個人に寄り添うものまで、さまざまなアプローチを知ることができ、今後、自らが行動を起こしていく上での気づきと勇気をいただきました。今回の経験を財産に、逆風を恐れず、行動していきたいと思います。



矢後千紘

「日本の教育現場に本物の民主主義を持ち込みたい」これが私が本プログラムに参加した一番の理由でした。多くの学校がグローバルリーダーの育成を目標に掲げている中で、そもそもリーダーを育てる学校内で本物の民主主義が機能しているのか、ずっと疑問や違和感を感じていました。グローバルリーダーに身につけてほしい民主主義の価値観とは何なのか、その気づきをアメリカで一つでも得られたらという想いで参加した本フェローシップでは、民主主義と教育をつなぐ大切なヒントを持ち帰ることができたように思います。

①「歴史」に立ち返る——私が想像していた以上に「歴史」には、民主主義を守っていくための教訓や反省が多くつまっていました。日系アメリカ人の歴史、アフリカ系アメリカ人の歴史、メキシコ系アメリカ人の歴史……無数にある歴史の中に被害の歴史があり加害の歴史がありました。民主主義が守られ、そして失われてきた過程もまた歴史の中にあり、このサイクルはつねに繰り返されていました。歴史は時代によって、伝え方によってどれだけでも解釈が変わり得るということを肝に銘じなければなりません。博物館、美術館、経験者の生の声といった歴史をアーカイブするものから「今」何を学ぶかは、教育活動の中で、対話を通して将来のリーダーたちとともに考えることができる重要なツールであると痛感しました。

②対話のスペースを確保する——訪れた場所で出会った方々と意見を交わす、その日に感じたことをフェローたちで振り返る、このサイクルを繰り返すことで私の中の思考は確実に深まっていきました。議論はまるでパンの生地をこねるように、横に広がり縦に広がり、時にはまとまり、時にはちぎれる。自分の声に耳を傾け、文字通り「多様な」人の声を聞いてさらに自分の思考を深めていくというプロセスは民主主義の基本ではないでしょうか。あまりにも忙しい今の教育現場では、対話する時間や場所を十分に確保することをおろそかにしすぎていると感じます。得た知識を自由に解放するスペースを確保することは、将来のリーダーたちを最も主体的にし、学びを深めるとても大切なプロセスなのだと再認識しました。

③次世代に伝える——今回関わったどのコミュニティも自分たちの想いや歴史を受け継いでいってくれる次のリーダーを探していました。未来のリーダーたちが、今見ているもの、感じたことを引き継がなければならないと責任を感じるのはどういう時かを考えたとき、私たち自身の態度が問われます。自分の意見を表明すること、おかしいと思うことに声を上げること、マイノリティーの意見もまた尊重される社会であること、多様な人が関わる意思決定の場で大切なことが決められること……私がグローバルリーダーに身につけてほしいと思う民主主義の概念を私たち自身が実践している社会でなければなりません。そこに若者たちが本当の価値を見出さなければ、彼らは主体的な伝承者にはならないのだと思います。

このフェローシップを通して、多くの人が「教育」の可能性を信じ、その重要性を示唆してくださったことにより、民主主義の一端を担う「教育」の役割を肌で感じることができました。そこに関わっている者として誇りをもって、日本の民主主義を底支える教育を、子どもたち、教員、地域の方々とともにつくっていきたいと思っています。

